

絶望的な状況を押し込めて、そうした事態を超越すること、諦念すること、正しくそれが十一句目の「忘却是身偏用意」の表現に凝縮されており、それを受けて初めて第十二句目「優於誼舍在長沙」の意味するものが明らかになってくる句作りではあると考えた。

## 二二

以上、五句目「此時傲吏思莊叟」十二句目「優於誼舍在長沙」の出典の考察を通して見えてくるものを論じてきた。

繰り返しとなるが、筆者はこの「官舎幽趣」が、郭景純の「遊仙詩七首——」を詩全体の根底に流れる詩情として生かしながら、その一方で、それに「莊子」や「賈誼」の故事を響かせて、今の自分の置かれている絶望的な状況を、「意識の変革」「自己忘却の念」によって乗り越えようとする心情を、重層的に、中国古典籍の故事や詩句より引用し、それを、巧みに折り込む構造を持った作品ではなかったのかと分析してみた。

注(1) 拙稿「菅原道真研究——『菅家後集』全注釈(十三)——」有明工業高等専門学校紀要」第四十二号

(2) 拙稿「菅原道真研究——『菅家後集』全注釈(一)——」国語国文学研究」第三十八号 熊本大学文学部

国語国文学会

(3) 拙稿「菅原道真研究——『菅家後集』全注釈(四)——」有明工業高等専門学校紀要」第三十八号 補説